

海軍 陸上部隊

トラツク島の海軍軍需部

福井県 高橋 治郎佐衛門

私は、大正三（一九一四）年十月出生、昭和九（一九三四）年七月、徴兵検査で甲種合格、十二月にくじよけの通知があり第一乙種となる。

昭和十三年八月、鯖江歩兵第三十六連隊補充隊第三中隊入隊、同十月、鯖江―宇品を経て、一年前に歩兵第三十六連隊が攻略した南京城に到着、当時、本部は湖南省岳陽県にあり。直ちに第一中隊に配属され、羊楼司へ行き、治安維持の任務につく。

昭和十四年五月、羊楼司の警備を熊本の第六師

団に引き継ぎ、六月に六連島に到着、二十四日、似島で検疫を受け鯖江の原隊に復員、七月九日、召集解除となる。

以下、軍属として、トラツク島に行き、同島に勤務中に再召集となり、食糧の補給の絶えた孤島での労苦

―トラツク島の海軍軍需部―

昭和十八年十月十七日、私は東京豊洲の海軍軍需部の工員として入隊しました。

私の家族は、祖母、母、妻、子供は男子二人、第一人、妹二人の計九人家族で、田は自作で二反五畝、小作地二反、それに山林約五反を所有し、建具、指物師を自営していました。

昭和十九年一月二十五日、「麗洋丸」に乗船、

横浜港を出発、中部太平洋東カロリン諸島のトラック島に向かいました。「麗洋丸」は東洋汽船(株)所属の五、四四五総トンの汽船で、三月四日に夏島に上陸しました。

横浜港を出発した時は三隻でしたが、途中で一隻が敵潜にやられました。私どもの乗ってきた「麗洋丸」はボロ船であったので船腹の下を魚雷が潜って、次の船に当たって、この船は助かったのだと船員が言っていました。私どもは前線のラバウルの部隊へ行く要員であるのに、この夏島に上陸させられたのでした。

また、乗船中に空襲警報が発令されましたが、我々は船の上では何もできず、甲板に出て「飛行機はどこから来るのかなー」とただ空を見上げていただけでしたが、これが米軍大型機によるトラック島大空襲のための初偵察だったのです。

我々は何も知らなかったのですが、トラック島の前線のマーシャル諸島のクエゼリン、ルオットの両守備隊が、この日玉砕されたのです。このと

き、ここトラック港には海軍の連合艦隊の基地として多くの戦艦や輸送船がひしめいていました。

そして、その後、十七日、米軍の大空襲を受けようとは誰もが夢にも思わなかったでしょう。

二月六日に、私たちの部隊の一部のものは、冬島の作業隊へ派遣され、また十日には、連合艦隊の主力艦が大勢引き上げていったのですが、冬島に派遣されていた我々は何も知らないでいました。

二月十七日、我々内地より着いたものに、夏島の本隊に集合するよう命令があり、朝早く冬島の通信隊棧橋の乗船場に夏島行きダイハツが来るのを待っていると突然、飛行機が飛んできました。

「こんなに早く海軍が訓練をしているのかなー」と思っていますと、それは我々をめぐってバリバリと撃つてくると同時に、目の前に浮かんでいる大きな輸送船や軍艦めがけて爆弾をばらばら落としてゆくのです。その瞬間、「ああっ！」という間に、その大きな船が「ズドン」という音と共に、火の玉となって沈んでしまう。ただ「あ

れよ、あれよ」という間の出来事でした。

そして、十七、十八日の両日、トラック島内の重要な軍の施設はほとんどやられ、また重油のタンクは三日も四日も燃え続けていました。私たちの乗ってきた「麗洋丸」も六時ごろ、三番艙全部と操舵室に直撃弾を受け、続いて二番艙付近にも至近弾を浴びて大火災となり、「総員退船」が下令されて、船体は十九日十二時半、火災の中で沈没、八人の船員が死亡したとのことでした。

「戦史叢書」によりますと、この両日に沈められた艦艇十隻、輸送船三十一隻、飛行機二百七十五、ほかに陸軍の富山歩兵第七十九連隊、松本の歩兵第五十連隊の兵士が乗ってきた「暁天丸」「新京丸」「藤波」「辰羽丸」など七百人の人員と戦車、火砲、医薬品、戦闘資材のすべてを沈められてしまったとあります。

三月七日ごろ、冬島にて作業中、突然、事務所より「面会人あり、事務所へ来るように」とのことで、急いでゆくと、昭和十六年五月に海軍軍属

として家を出て行った私の弟が来ているのです。

家へは横須賀海軍需部気付ウ五〇六〇の手紙が時々きてはいましたが、それはどこからであるか、私には一向に分からなかったのです。

約三年ぶりの面会で、弟は前線から引き揚げて内地へ帰る命令で夏島まで帰ってきて、トラック基地に来る船が毎日のごとく沈められ、その乗船者名簿を調べているうちに無事に入港した「麗洋丸」に兄貴の名前があるので吃驚して、この島へ尋ねてきたのだという。

十日ごろになって、私は Deng 熱に罹って頭が痛く、宿舎で休んでいたとき、大きな赤十字をつけた弟の乗った「高砂丸」が目の前を静々と南水道の方へ下って行きました。これで私が今どこにいるか、弟を通じて家族に知られると思うと嬉しいやら、涙を流しながら見送ったものです。

三月十五日、竹島の航空隊へ派遣されました。島は小さく、夏島のすぐ前にあり、小高い山を削って海を埋め立て滑走路を造った海軍のゼロ式戦

闘機の基地です。毎日朝、昼、午後、夜と空襲の連続で、あらゆるものがめっちゃめちゃにやられてしまいました。我々は何度も何度もやられ、命拾いをして、五月には冬島の部隊へ戻ったのですが、我々は一人の戦死者も出ませんでした。

ゼロ戦の勇士は飛び立って行っては、ほとんど戦死です。帰隊した航空隊の兵士は飛行場のあちこちに戦死したままの姿で倒れているのを見ました。

六月になると、冬島にいる海軍軍属のうち、元陸軍の軍人であった者に現地召集の命令が来て、私たちは冬島に来ていた富山歩兵第六十九連隊の大隊砲に編入されました。

しかし七月二十日、召集された我々は、元の海軍の隊に戻されました。そして海岸に敵の上陸を防ぐよう石垣のようなものを作る毎日でした。そして体が衰弱して一晩でフランペシヤという風土病に罹り、足や手の関節に赤いぶつぶつが噴き出し、白い汁が出ます。ハエが来てそれを吸うのが

痛くてたまらぬのです。

衛生係に言っても薬もなく、海水で洗って日光に当て、膿を止めるしか仕方がないのです。テラポールがあれば直るのだが、それが無い。

九月ごろ、京都府宮津出身の柿根君と二人、トラック諸島を囲っている外環礁の小田島の水道を守る守備隊へ派遣されました。ここはこの水道を通過する船を見張っている部隊ですが、日中は米軍が夏島や竹島、春島、その他の島々の重要な施設に爆弾を落として帰って行くのを見ているだけでした。そしてこの島に派遣されたお陰で、身体が少し元気を取り戻すことができました。

竹島の航空隊に派遣されていたころ、内地より一緒に来た私たちの本隊は、ラバウルへは行かず、トラック島西方のメレヨン諸島に派遣されたのですが、そのメレヨン島も米軍の爆撃を受けて食糧がなくなり、病人や負傷兵が出ても、夏島の病院へ送れず、運のよいものだけが潜水艦で夏島の病院へ入れるという状態であったといえます。

小田島へ派遣される前、夏島で、本当に骨と皮だけの人間が歩いていて、近づいて見ると、何と内地から一緒に来た小泉君とは驚きました。その後、小泉君がどうなったかは知りませんが、終戦後、聞いた話では、ここにいた部隊は十人中八人は死んだとか言うことでした。

昭和十九年十二月、夏島の本隊へ戻されたのは、冬島の食糧事情が悪くなり、本隊へ追い出したようでした。デンデン虫の卵が産み付けてあるのを見つけ、誰にも知らせず、隠れて採りに行き、海水で煮て食べました。また夜、爆撃で焼かれ、野積みになされている米を盗んだりもしまして。食べ物もだんだんなくなり、朝晩の二度のおかゆの盛り付けた、その椀の取り合いとなると、班員一同命がけで争うまでになってしまったのです。

昭和二十年二月ころになると、各隊では栄養失調者が多く出て、作業にでられる者がなくなりました。また水曜島付近へは米軍機は余り爆撃に来なくなり、助かりました。だんだんサツマイモの

収穫も多くなり、島民とも親しくなって、少し食糧をもらって、身体も少しずつ回復してゆきました。

六月ごろに、空母二、巡洋艦四、駆逐艦四の英国機動部隊が現れ、五十〜六十機の艦載機が入れ替わり立ち代り、夏島、竹島に爆撃と艦砲射撃を加えてきました。小さい島は吹っ飛んでしまうのではないかと思うほどでしたが、何も出来ず、ただ防空壕の中でちじこまっていました。

八月、飛行機の飛来数も少なく、射撃することもなくなりました。三月ごろに植えたサツマイモが大きくなくなったところ、敵機の飛来は全くなくなりました。この戦争は、どうやら負けたそうだと、夏島の本部から帰ったものの話が伝わってきました。とんでもない爆弾が広島、長崎に落とされ、六十年くらいは草も木も生えないなど、いろいろの情報も聞かれるようになりました。

待ちに待った帰国の日が来たのは昭和二十一年十二月一日、軍艦「櫂」で浦賀に上陸でした。